

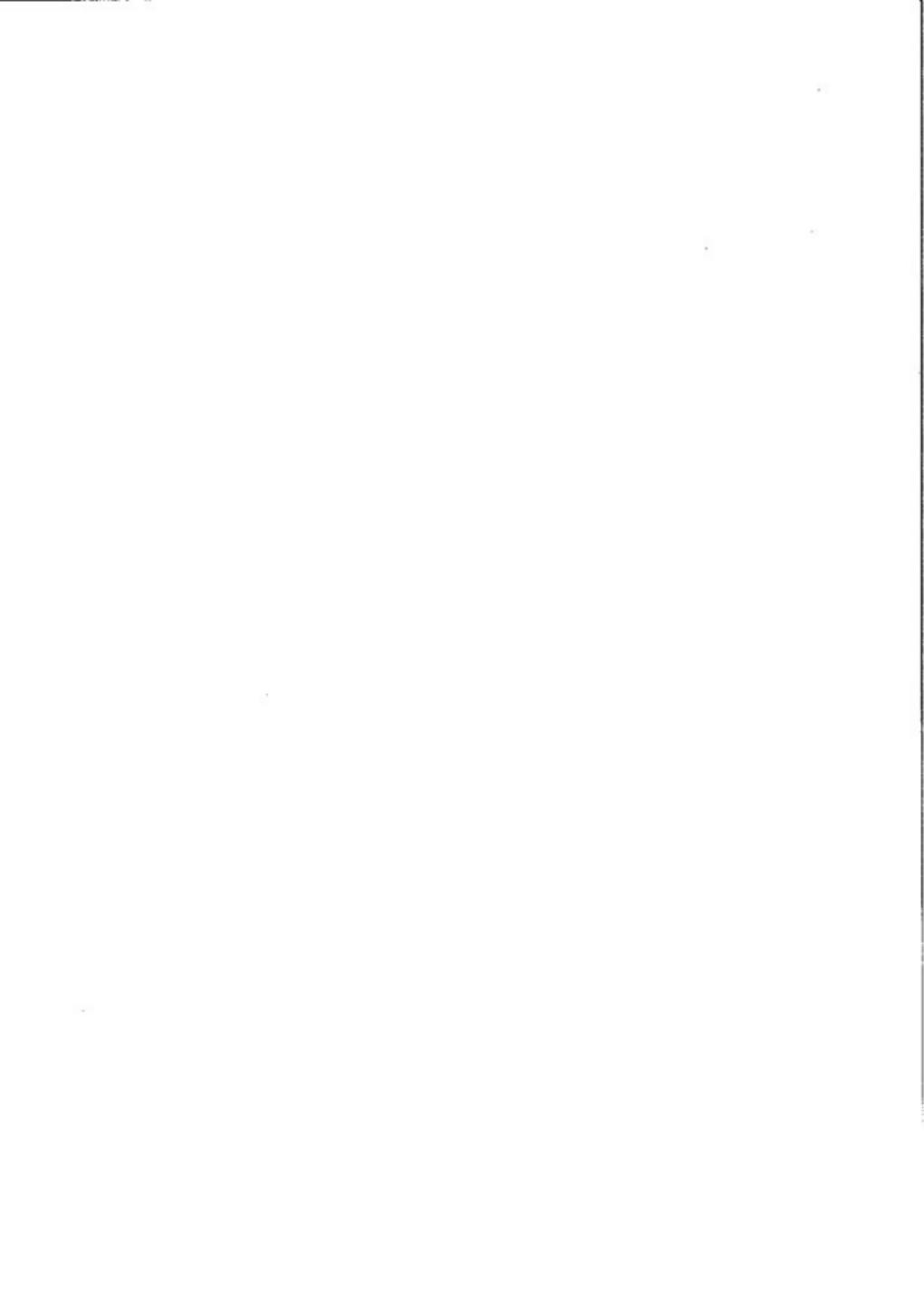
# 河内 大 竹 遺 跡

——八尾市水道局低区第3配水池送配水管布設用地内埋藏文化財発掘調査報告——



1980

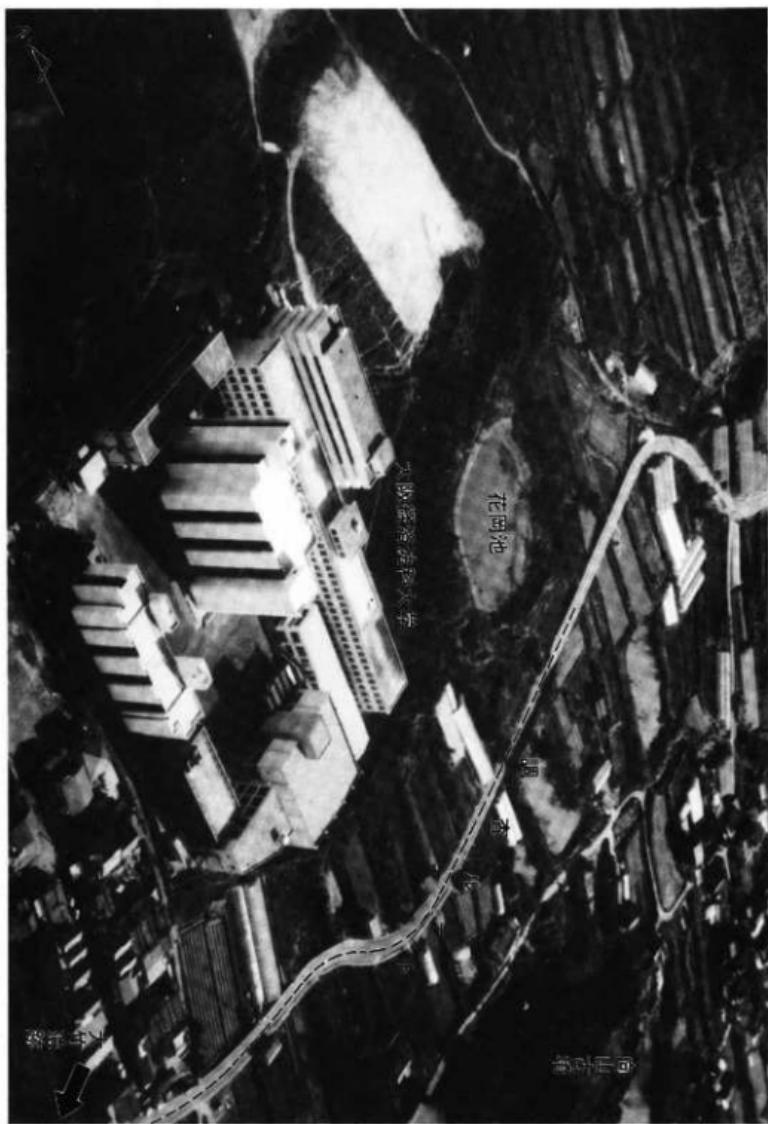
八 尾 市 教 育 委 員 会



## 本文目次

1. 序 文 .....	(村川行弘)…	1
2. 例 言 .....		3
3. 調査日誌 .....	(福田 勲)…	4
4. 大竹遺跡の位置と歴史的環境 .....	(瀬川芳則)…	7
5. 調査の報告 .....	(瀬川芳則)…	11
1. 遺 構		
2. 出土の土器		
(A) 第9地点溝状遺構の土器		
(B) 第10地点溝状遺構内上層の土器		
(C) 第10地点溝状遺構内下層の土器		
6. ま と め .....	(村川行弘)…	25

第1図 大竹遺跡付近航空写真・昭和53年・大阪経済法科大学撮影



# 1. 序 文

本学考古学研究室では八尾市水道局・八尾市教育委員会の委託をうけて、昭和53年11月20日より昭和54年3月31日までを調査期間とする発掘調査をおこなった。八尾市大竹705の八尾市水道局低区第3配水池建設用地である旧花岡池の南と西の堤防外の海拔約70メートルから海拔約60メートルの地域である。この調査結果は昭和54年3月30日付で「花岡遺跡発掘調査概報」として公刊した。

この調査に統いて、八尾市水道局低区第3配水池送・配水管布設工事にともない、「花岡遺跡」から西方への工事用地の埋蔵文化財発掘調査が必要となってきた。当地域の地理的・歴史的環境については前述の調査概報で述べたが、生駒山脈の西麓、海拔約60メートルから海拔約40メートルの地域である。地番は八尾市大竹701の1先、通称八尾市大竹字坂本の地区である。

八尾市水道局・八尾市教育委員会・大阪経済法科大学の三者で協議を重ね、昭和54年1月30日付・八教社文第97号で八尾市教育委員会教育長坂本正一より「文化財保護法」第98条の2の規定による「埋蔵文化財発掘調査通知書」を文化庁長官に送付し、調査期間は昭和54年2月10日から5月31日までを予定した。調査委託をうけた本学では昭和54年2月2日付で八尾市教育長坂本正一(甲)・大阪経済法科大学考古学研究室代表者村川行弘(乙)・八尾市水道局西川實(丙)の間で調査委託契約書を作成調印し、2月7日より送・配水管布設工事地区に限定した発掘調査に着手した。その間、2月15日付で「埋蔵文化財調査委託契約の契約内容の変更について」八尾市教育長坂本正一と大阪経済法科大学村川行弘の間で協議がもたれ、2月19日付で「八尾市水道局低区第3配水池送・配水管布設工事用地の埋蔵文化財発掘調査委託契約に関する覚書」に前述の甲・乙・丙三者で調印した。これは多量の遺物出土に伴なう措置であった。

調査の概要是本概報の本文で示すとおりであるが、地域によって土師器・須恵器の包含層、庄内II式の土師器の一括資料を包含する溝状造構、大量の弥生後期土器を包含する大形溝などが検出された。とくに弥生後期土器は二層に大別できる一括遺物であり、後期前半の第Ⅱ期より後期後半の第Ⅰ・第Ⅲ期の間の遺物であり、生駒山西麓の弥生後期土器の一編年基準資料を追加したことになる。若干ながら河内系以外の土器が混在していることも注目されよう。

工事用地に限った調査であったが、この調査により、周辺地域に弥生後期後半から古墳時代初頭にかけての生活の場が遺存していることが推測され、集落跡をはじめ遺跡の性格を明確にする必要が今後の課題となっている。

調査に際しては、八尾市水道局・八尾市教育委員会・工事担当者の方々から全面的な協力をうけた。また大阪経済法科大学からは吉田力雄学長・金沢尚淑理事長の援助をうけた。地元の住民の方々の配慮にも感謝の意を表したい。なお、出土遺物は文化庁長官への通知書にもとづき本学にて整理・保管している。

昭和55年5月

大阪経済法科大学考古学研究室

教授 村川行弘

## 2. 例 言

1. 本書は、大阪経済法科大学考古学研究室が、八尾市水道局及び八尾市教育委員会の委託により実施した八尾市水道局低区第3配水池送配水管布設工事用地内、八尾市大竹701の1約1300m<sup>2</sup>についての、発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪経済法科大学教授村川行弘を調査団長とし、同助教授橋本久を調査委員、同非常勤講師瀬川芳則を調査主任、同考古学研究会福田薰・真田真一・坂本正幸・高橋正則・小嶋久夫・北岡雅臣・佐倉操・伊藤秀祐・金沢哲人・旧口孝典を調査員として実施したもので、昭和54年2月7日に着手し同3月24日をもって現地調査を終了した。調査にあたっては、八尾市水道局・八尾市教育委員会・大阪経済法科大学など関係当局の絶大なる援助を得ることができた。
3. 本書作成にあたっては、上記関係者の他、大阪経済法科大学考古学研究会森口訓男が参画し、G U A M 大学片岡修・枚方市文化財研究調査会宇治田和生・同横藤田晶子・西田敏秀の各氏から遺物実測・遺物写真撮影について協力を得たほか大阪経済法科大学非常勤講師岡田保造・芦屋市教育委員会森岡秀人らの各氏をはじめ、多くのひとびとから助言を得た。

### 3. 調査日誌

- 昭和54年2月7日 発掘調査の開始。海拔55m付近より、上方へ掘り始める。第1地点及び、第2地点の土層断面を実測する。  
第1地点において、わずかに土器片を含む層を確認する。
- 2月9日 第3地点の土層断面を実測する。
- 2月11日 第4地点の土層断面を実測する。
- 2月12日 第5地点の土層断面を実測する。
- 2月15日 第6地点の土層断面を実測する。
- 2月16日 第7地点において土師質土器小片を数点検出する。  
土層断面を実測する。
- 2月17日 第8地点にとりかかる。最も低い地点海拔37m付近から掘り始める。  
弥生式土器小片を含む層を確認する。
- 2月19日 第9地点浅い溝状遺構を確認した。遺構内には数点の土師器が含まれていた。
- 2月20日 弥生後期の土器を多量に含む溝状遺構を確認した。市教委・市水道局関係者、村川団長・瀬川調査主任らは、今後の調査方法について協議を行う。



第2図 テント内で雨中の発掘

2月21日 雨の中、テント屋根を張り、その下で溝状遺構の掘り下げをおこなう。

- 2月22日 雨の中、テント屋根を張り、その下で溝状造構の堀り下げをおこなう。
- 2月23日 雨の中、テント屋根を張り、その下で溝状造構の堀り下げをおこなう。
- 2月24日・25日 溝状造構の平面、及び断面の実測を完了する。
- 2月26日 第11地点の土層断面を実測したが地山まで擾乱されており、また遺物・造構は検出されなかった。



第3図 吉田学長の視察風景

- 2月27日 第12地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 2月28日 第13地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月1日 第14地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月2日 第15地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月3日 第16地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月5日 第17地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月6日 第18地点の土層を実測する。造構・遺物認めず。
- 3月7日 第19地点より、土師質の土器小片が出土したが、流出遺物と考えられる。土層図を実測する。
- 3月8日 第20地点より、土師質の土器小片を出土する。同上。
- 3月9日 第21地点より、弥生式土器小片を検出する。
- 3月11日 第22地点の土層を実測する。
- 3月12日 第23地点の土層を実測する。
- 3月13日 第24地点の土層を実測する。

- 3月15日 第25地点の土層を実測する。  
3月16日 第26地点の土層を実測する。  
3月19日 第27地点の土層を実測する。  
3月22日 第28地点の土層を実測する。  
再び7地点より斜面上方へ堀り始める。  
3月23日 第29地点の土層を実測する。  
3月24日 第30地点の土層を実測し調査を終了する。  
4月20日 遺物整理作業開始。  
昭和55年5月31日 遺物整理作業終了。

(福田 薫)

#### 調査団組織

調査団長	村川行弘	大阪経済法科大学教授
調査委員	橋本 久	同 助教授
調査主任	瀬川芳則	同 非常勤講師
調査員	福田 薫	考古学研究会 真田真一 同 坂本正幸 同 高橋正則 同 小嶋久夫 同 北岡雅臣 同 佐倉 操 同 伊藤秀祐 同 金沢哲人 同 田口孝典 同

## 4. 大竹遺跡の位置と歴史的環境

大竹遺跡は大阪府八尾市大竹に所在し、今回の調査地は、大阪経済法科大学校地の南側を生駒山麓から山腹へ東西方向に通じる仮設道路下にあり、近鉄奈良線瓢箪山駅の南約3kmの地点にある。古代における行政区で示すならば、河内国高安郡掃守郷となろうか。古代高安郡に深い関係をもつものに、天智紀・天武紀記載の高安城があつて、最近古代山城の発見をめぐり八尾市民グループの活動が話題となつたことがある。また、高安城に関連しては、この他に統日本紀に高安條の記事が和同五年にあるが、これらわが国古代におけるいわば最後の首都防衛線は、大竹遺跡東側上方の山頂一帯に位置していたものと思われる。

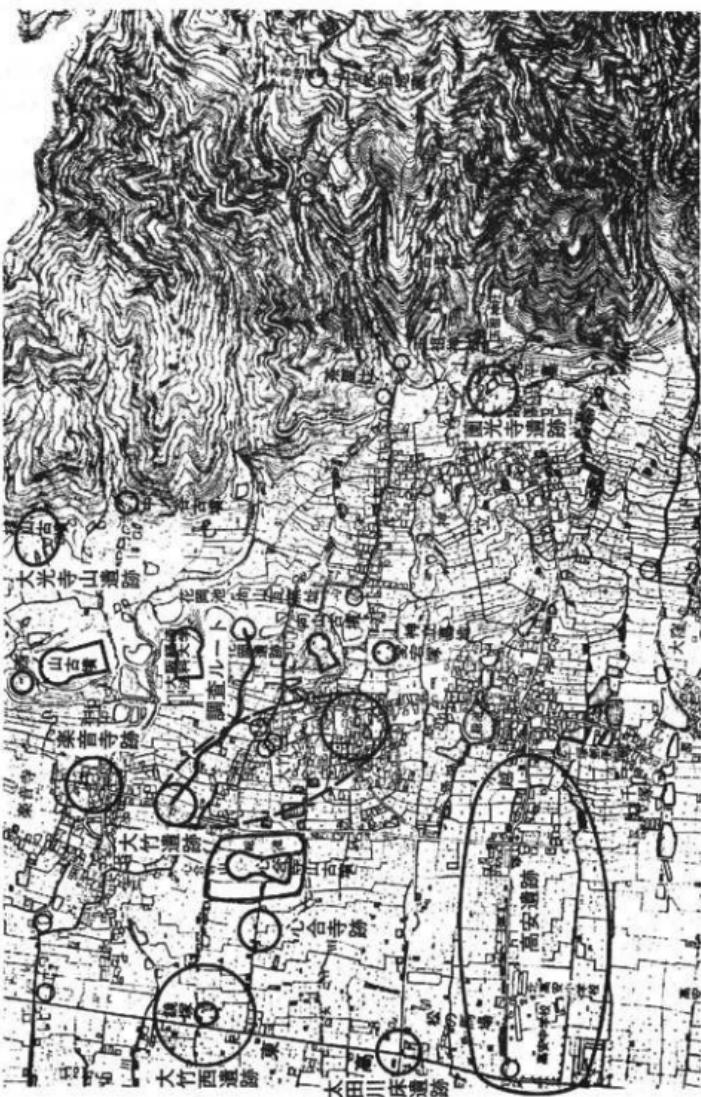
遺跡の東南東約1km、海拔120mには、延喜式神名帳記載の玉祖神社があり、往時は玉祖明神とか高安明神ともよばれ、明治以前付近11ヶ村の産土神として親しまれていたことで知られているが、ここには明治年間に都川の天王神社・服部川の八幡神社・神立の山口神社・楽音寺の熊野神社・水越の都夫久美神社・大竹の鴨神社・火窪の御祖神社・万願寺道垣内の住吉神社・万願寺東口の八幡神社・万願寺蘆沢の県主神社などを合祀しているなかに三社の延喜式内の古社が見うけられる。水越の都夫久美神社・火窪の御祖神社及び、大竹の鴨神社がそれである。

大竹の鴨神社の祭神の健角身命は鴨君の祖とする説もある。ともあれ和名類聚抄の高安郡にある郷名のなかの掃守と、この式内社名の鴨とが、音韻からみて結びつくことはまずまちがいなさそうである。

生駒山地の南端まで約7kmのこのあたりで、やや小高く海拔488mの高安山が、大竹遺跡の東南東に見え、地元では、この付近一帯の生駒山地西麓を高安山麓とよぶことが多いが、この高安山麓一帯には、古代にあっては玉祖連の一族が居住し、さきの玉祖神社を氏神としてまつっていたものと考えられている。ちなみに、八尾市神立にある玉祖神社の北側を東に登り十三峰を越えると、そこから約6kmで班鳩町の龍田に通じる山越えの道十三街道は、玉祖神社から西へ道をとると、この道はやや北寄りに下り坂となりつつ、約1kmで大竹遺跡の今回調査地南側を通り、楽音寺を経て東大阪市の高井田から深江へ、そして上町台地東縁の玉造へと通じているのであって、上町台地の玉造と高安山麓の玉祖とはいかにも相通じている名称であり、この両地を結ぶ里程は約12kmである。それは、古代河内湖の南縁を、ほぼ一日で足りる行程であった。こうしたことがらをふまえたうえでの、十三街道の考古学的再検討と調査とが、今後は注目されなければならないであろう。

大竹遺跡の周辺は、生駒山地西麓の中河内では、もっとも重要な古墳群を形成して、は

第4図 大竹遺跡付近の遺跡分布（1万分の1）



やくから知られていたところである。とくに大竹と楽音寺には、古墳時代の前期・中期・後期にまたがって形成されていった古墳が、大きく一群をなしている状況が認められる。

これらのうちで前期に属すのは、楽音寺の西の山古墳・花岡山古墳と大竹の向山古墳で、いずれも前方後円墳であった可能性が強いが、西の山古墳は、大阪経済法科大学の北側、楽音寺集落の東側、海拔約70mにあって前方部が南面する古墳で、明治14年に直径約27mの後円部から、石棺が発見され、人骨・刀剣・銅鏡・勾玉などの出土を見ている。この西の山古墳と池をへだてて、その南側にあった丘陵を花岡山といい、この丘陵上にあったのが前方部西面の花岡山古墳で、後円部から円筒埴輪が発見されたこともあるというが消滅してしまった。向山古墳も前二者と同じく、海拔約70mの支丘上に造られた前方後円墳であるが、採土のために半壊してしまっている。

中期古墳としては、これら前期古墳よりも山麓を西へ下った海拔約30m、大竹遺跡今回調査地の南西約70mに墳丘の長さ約130m、周囲に水をたたえた濠をもち、前方部を南面に築いた見事な大竹の心合寺山古墳は、生駒山地西麓でこれまでに発見されている古墳のなかで最大規模の前方後円墳として知られている。濠は南端と北端に堤を築いて、東部分と西部分に分割し、それぞれに水位を保つ構造に造っており、これまでに墳丘から多くの埴輪破片が採集されているという。また玉祖宿弥の祖建荒木命の墓とするいい伝えもある。また、海拔150mの支丘上から、前述の古墳を見おろす位置にある中の谷古墳では、昭和8年に墳頂から蓋石2個で覆った組合式箱式石棺が見つかり、棺内には男女二体の人骨と刀子・玉類・漆塗りの櫛などの副葬品が納められていた。墳形については、前方後円墳とみる意見もあるが、よくわかっていないままになっている。古い合葬例としても注目すべきであろう。

心合寺山古墳の西約200m、海拔17mの東高野街道の東側傍に、採土のために半壊してしまった鏡塚があり、昭和34年に府史跡となっている。現状では、直径28m・高さ5mの比較的大きい円墳と見られているが、前方後円墳とするものもある。中期末から後期初頭の古墳と考えられている。のちにその墳丘が火葬墓として用いられたことを示すものとして、石横の蓋の破片が見つかっている。向山古墳の南約100mにある愛宕塚は、直径約22mの円墳で、巨大な横穴式石室をもつ後期古墳である。横穴式石室の長さは16.7mあり、府下屈指の大きさをもっている。家形石棺を用いていたらしくその破片が残されていたほか、馬具や鐵鏡・ガラス製の小玉・土師器・須恵器などの副葬品や、火葬骨を収めて追葬した土師器の長頸壺が見つかるなど、その石室の巨大さと共に出土遺物においても、当地の前期から続く古墳群を考察するうえで、興味深い様相を呈している。この愛宕塚にも、玉祖宿弥の祖建荒木命の墓とする伝承がある。

これらの古墳からなる古墳群のほかに、大竹遺跡周辺には、鏡塚古墳をそのほぼ中央に

して直径約200mの範囲が予想される大竹西遺跡、この大竹西遺跡から東高野街道ぞいに約250m南の太田川床遺跡が、さらに南へ100mには東高野街道をほぼその西限とする南北約200m・東西約500~600mの高安遺跡が、いずれも集落遺跡とみなされて点在している。大竹遺跡も同様の遺跡である。

これらのうち太田川床遺跡を除き、いずれも弥生時代中期にさかのぼる遺物が採集せられており、また高安遺跡・大竹遺跡からは、古墳時代遺物等の出土をみている。とくに清原得蔵氏採集の高安遺跡の古墳時代遺物のなかに、玉類製作の原石や未製品などが含まれていることは、そこが古墳時代における玉作り集落遺跡としての性格を、もつものであったことをものがたるものであって、この地域の古代史研究にとってそれは大変重要な発見であった。なお、大竹遺跡についても、南北約500mに及ぶ相当広範な集落遺跡であった可能性が強い。これらの集落遺跡と大竹遺跡との関係もまた、先述の古墳群との関連と共に、今後の調査にまつところの大きい研究課題である。（瀬川 芳則）

## 5. 調査の報告

### 1. 遺構

昭和53年度に発掘調査をおこなった結果、中世遺構の検出をみた旧花岡池周辺の花岡遺跡から、西へ下る仮設道路の北側部分について、八尾市水道局が旧花岡池に構築した第3配水池からの送配水管を布設するために、道路面としていたコンクリートを切断除去し、道路面以下を掘りさげるに際し、全長約400m・幅約3mについて遺構・遺物の確認をおこなったところ、調査地及びその隣接地において、多くの遺物散布地点を見つけ(図版15)、また数地点で遺構または遺物包含層を認めた。

#### (1) 第1地点 (図版16)

アスファルト舗装下約160cmまでに4層からなる盛り土を置き、その下に第1層淡黄褐色砂質土・第2層黄茶褐色(黄褐色)粘土混砂質土・第3層暗茶褐色砂質土・第4層茶褐色砂質粘土・第5層黒褐色粘質土と続き第6層で砂礫土の地山となるが、第5層には土師器・須恵器の小破片を包含していた。第2層上面の高度は、O.P.+53.0mである。

#### (2) 第4地点 (図版16)

上層のA～E層までは盛り土で、O.P.+55m付近から第1層淡茶褐色砂質土・第2層暗茶褐色砂質土・第3層暗褐色砂礫の地山となるが、第2層から土師器の小破片が出土した。

#### (3) 第7地点 (図版16)

上層をなすA～D層は盛り土で、旧地形が南側に下向する状態が、その断面で明瞭に認められた。第1層の暗褐色砂質土に土師器小破片の包含があったが、これは第4地点と同じ土層である。

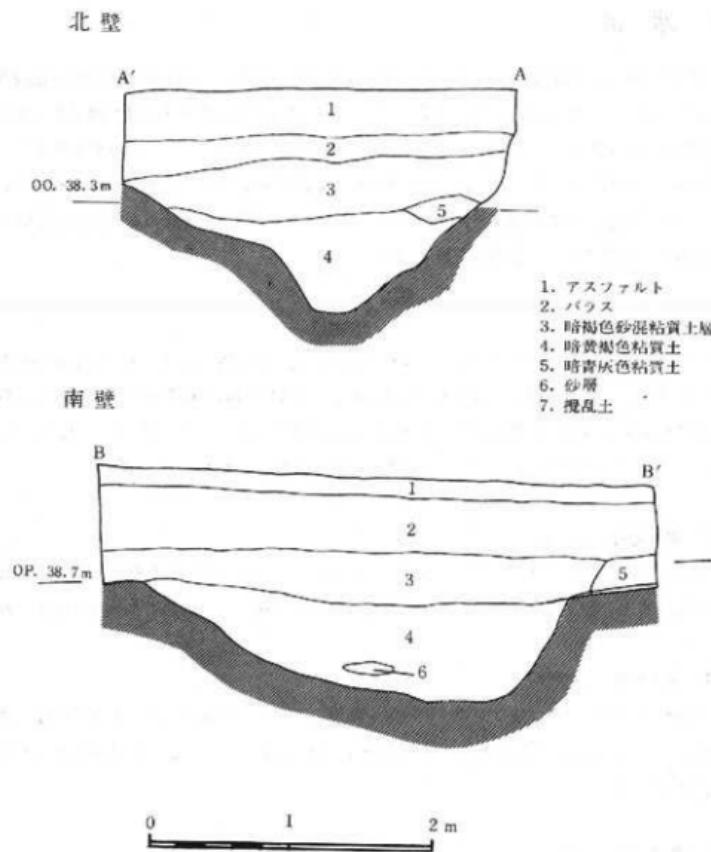
#### (4) 第8地点 (図版16)

盛り土のA・B層直下に第1層暗褐色砂質土があり、第二層以下は地山の可能性が強い。なお第1層から土師器小破片が出土している。

#### (5) 第9地点 (図版16)

盛り土下の第1層暗褐色砂質土に、溝い溝状の遺構がほぼ南北に掘られ、完形土器数点

第5図  
第10地点溝状遺構断面実測図



等が一括出土した。

(6) 第19地点 (図版16)

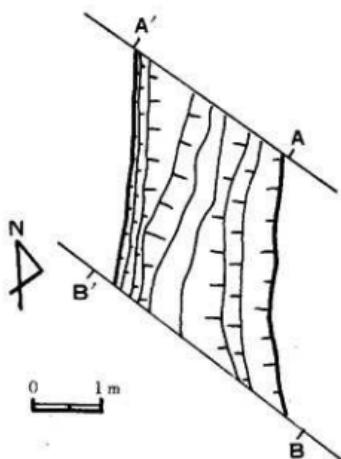
盛り土A層に続き第1層黄褐色砂礫土・第2層暗褐色砂質土・第3層灰褐色礫混砂質土となり地山に至るが、ここでも第2層から土師器小破片の出土をみている。

(7) 第21地点 (図版16)

A～C層までの盛り土下に、第1層の黒褐色土があり、弥生式土器の小破片が見つかっている。第2層以下は地山となる。

(8) 第10地点 (図版2・図版3・第5図・第6図)

第1層・第2層を除去すると、直ちに溝状遺構の存在が確認できた。検出した溝状遺構は、幅約220cmではば南北方向にのびるが、検出した溝状遺構の南西隅では、やや東寄りに溝肩の広がりが認められるので、調査地南隣接地で東に方向を転じることも考えられる。



第6図 第10地点 溝状遺構  
第3層と第4層からは、相当大量の弥生式土器が出土しているが、これらの土器群は、この溝状遺構の性格を示す重要な遺物といえよう。 (瀬川 芳則)

溝状遺構内には、第3層暗褐色砂混粘質土・第4層暗褐色粘質土の大別2層があり、部分的に第5層とした暗青灰色粘質土や、第6層とした砂塊が、いずれもブロック状に入っていた。溝状遺構の深さは、北壁断面で第3層上面までを測ると最深部116cmあり、溝底の幅は30～40cmで、その断面形を見ると、北壁断面ではややV字溝に近い形をなしている。また、溝底の高さは北壁付近と南壁付近とで異なり、北壁でOP・37.54m、南壁ではOP・37.75mとなって、北側に低く掘られていることがわかるのである。

## 2. 出土の土器

遺物は採集によるものを含めると、石器・弥生式土器・土師器・須恵器などの種類があり、遺物として小さな破片までを1点と数えるならば、その総点数は4000点をこえてしまう。ここでは、以下に遺構と併せて出土した土器について、その主たるものについてのみ報告するにとどめたい。

### (A) 第9地点溝状遺構の土器

#### (1) 壺(図版4-1)

器高15.5cm、胴部径15.1cm、頸部径7cm、頸部高5cm、口径10.2cmで、底部は丸底で胎土は精選されており、ほとんど砂粒を含んでいない。扁球形の体部にやや大きく外向きで直線的にのびる口縁部をもつ。頸部内面には、体部との接合の際の指頭大の圧痕があり、口唇部の断面形を尖頭形に作っている。体部内面はヘラ削りで器壁を厚さ3mmほどに薄く仕上げ、体部外面ではヨコ方向の口頸部外面にはタテ方向の細いハケ目(刷毛幅4~7mm)が認められる。成形後は、器体に胎土と同質の粘土を原料としたスリップをおこなっているが、口頸部ではその上にタテ方向直線の暗文を加えている。類似の器形をもつものに奈良県纏向遺跡東田地区土塙5からの出土例がある(註1)。

#### (2) 高坏(図版4-2)

器高10.5cm、脚部高5.9cm、口径12.2cm、脚部底径8.3cmで、口縁部はやや内湾してたちあがり、柄にむかって急に聞くラッパ状の脚部には、2孔の透孔がある。杯部の体部外面にタテ方向の細いハケ目を、脚部外面にはタテ方向のヘラ磨きが透孔下端付近までタテ方向にほどこされており、脚部内面ではシボリ痕をヘラによって削って消している。成形ののちスリップを加え、杯部内面には、その中心から放射状に直線的な暗文をめぐらせている。脚部と杯部の中空部分には、円錐台状の粘土塊を埋め、その上面を指で同心円形になでて接合し、口縁部と脚部裾端面はヨコナデによって仕上げている。布留式に先行すると考えられている類似の器形が、大阪府船橋遺跡にある(註2)。

#### (3) 高坏(図版4-4)

器高18cm、脚部高7.1cm、口径26.4cm、脚部底径13.6cm、口唇部は面取りによってやや角頭を呈し厚さ約6mmあり、このため口唇部外縁が棱線をなしている。胎土は前二者と同じく精選した粘土を用い小量の細砂粒の混入が認められるにすぎない。脚部には三孔の透孔があり、裾部でラッパ状にひろがる脚柱部内面に、筒状のものを挿し込んでのちしづり、

筒状のものを少し回転させて抜きだしたと思われる痕がのこっている。脚柱部内面は、そのシボリ痕をヘラ削りによって消している。脚柱部内面を除く器体外面にハケ目をほどこしている。ハケ目の方向は器体外面でタテ方向に、杯部内面ではナナメ又はヨコ方向にほどこされており、脚部内面でも透孔下端から下方の裾部に認められる。また、内外面にスリップをおこない、口縁部外面にタテ方向の暗文を、杯部内面には放射状の暗文をめぐらせ、脚柱部外面はタテ方向のヘラ磨きをおこなっている。大阪府上田町第1層出土例(註3)がこれに近い器形であろう。

註1. 石野博信・関川尚功「轍向」昭和51年 檻原考古学研究所

註2. 原口正三・田辺昭三・大塚初重「船橋遺跡出土の土器」・「土師式土器集成」所収 昭和46年

註3. 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」大阪府立島上高等学校研究紀要復刊第3号所収 昭和44年

### (B) 第10地点溝状遺構内上層(第3層)の土器

#### (1) 手づくねの甕(図版4-3・図版12-3)

口径9.2cm、頸部径8.8cm、体部最大径9.8cmのチョコレート色の色調をもつ土器で、器体内外面に指頭によると思われる圧痕をのこし、胎土中に1~5mm大の砂粒を含む。体部外面に煤の付着がある。

#### (2) 甕(図版5-1・図版12-7)

体部は底部をのこすのみで欠損しているが、脚台付の甕であったと思われる。脚台部外面に指頭圧痕を三重にめぐらせており、体部内面と脚台端部内面とに黒斑が認められる。器体の色調は灰褐色で、第10地点溝状遺構内出土の土器の大部分が、赤茶褐色とでもいえるチョコレート色の色調と胎土中の角閃石が目立つところの、いわゆる河内の生駒山地西麓に特有の土器であるのに対し、やや様相を異にする上器のひとつで、他地域からの搬入土器とみなすことができる。

#### (3) 壺(図版5-2・図版12-8)

底部を欠損している、推定器高約20cm、口径12.9cm、頸部は径9.3cm・高さ3cm、体部最大径は球状の体部の中位からやや下方にあって、19.5cmである。外反する口縁部は、下位では直立に近いが中位から急に外反し、上位で一層屈曲をつよめているもので、口縁端面は幅5mmの垂直な面をなし、この端面に一条の疑凹線がめぐっている。また、口縁部内外面に、横ナデによる調整が認められる。体部内面にヨコ方向のハケ目、外面は一条の長さ1.7cm、幅約1mmで約5mm間隔で並列6条又は6条以上を1単位とする横方向のタタキ目の上を、タテ方向の密なヘラ磨きで消している。この外面ヘラ磨きは、口縁部下半から底部

付近にまで及ぶが、底部付近ではやや粗雑に施したらしく、さらに器体表面の損消が激しいこともあってヘラ磨き痕のこりは悪い。ヘラ磨きは、まず器体上位の頸部付近からはじめ、時計回りの方向で順にヘラを使っていき、一周したのち次々に肩部・胴上部・胴下部という順序で、いずれも時計回り方向に磨きあげていっている。土器の色調はチョコレート色で、胎土に角閃石を多く認めることが出来る。

#### (4) 叠形土器の頸部 (図版5-3・図版12-9)

頸部の径12.7cm、頸部の器壁厚約1cmの壺の頸部付近の破片である。土器の色調は黄褐色で、これも他地域からの搬入土器とみてよい。頸部の内外面にヘラ磨きがある。頸部のヘラ磨きは外面がタテ方向、内面ではヨコ方向である。頸部と体部との接合部には、幅約1.5cm・高さ8mmの断面三角形をなす粘土の突帯をめぐらせたうえ、このハリツケ突帯にやや粗雑で等間隔とならない刻み目をつけて飾っている。またこの接合部内面には、指頭圧痕が認められる。

#### (5) 高 坏 (図版4-5・図版12-5)

脚部の裾末端を欠損しているが、推定器高約15cm・口縁部径24.5cm・杯部高6cmあり、その器形は杯体部でやや内窪し、口縁部では短く外反し、端部はまるくおさめている。脚部は裾部でやや大きく広がりラッパ状をなすタイプで、透孔4孔をもち、脚柱部内面にシボリ痕をとどめ、杯体部と脚部の外面にタテ方向の密なヘラ磨きを、口縁部外面には、ヨコナデをほどこして仕上げているが、体部と脚部との接合部外面で、ヘラ磨きの下に消し残したハケ目がわずかに観察できる。円板充填法を用い、色調はチョコレート色で、胎土に角閃石と砂粒を多く含む。

#### (6) 器 台 (図版4-6・図版12-6)

器高13cm、口縁部径16.9cm、裾部底径14cmで裾部に透孔4孔をもつ。口縁部に粘土帯をはりつけて、端面の幅を1.7cmに作った垂下口縁をもち、そこに二条の疑似凹線をめぐらせている。体部内面に時計方向のヘラケズリ、口縁部内面にハケ目、体部外面はハケ目の上からヘラ磨きをおこなっている。色調はチョコレート色で、いわゆる生駒山西麓の土器である。

### (C) 第10地点溝状遺構内下層 (第4層) の土器

#### (1) 叠形土器 (図版6-5・図版13-18)

器高19.2cm、口縁径12.7cm、頸部径9.7cmの広口の壺である。器体外面の損消が激しく、

体部中位から上位にかけの黒斑を認め得るにすぎない。底部外面と頸部内面に指頭圧痕があるほか、体部内面下位にヨコ方向のハケ目を認める。底部はやや突きだして、その径4.5cmに対し約1.5cmの高さを有し、底面中央部を高さ約1mmのわずかなアゲ底状に、また底部の外縁を約1mm削りとり内傾させている。頸部は体部からやや内寄り、口縁部では逆に大きく外反させ、口縁端部付近からはやや内寄りさせて、受口状のまるみをもたせた口唇部となっている。器体の色調はチョコレート色で、砂粒と角閃石を多く含む。なお、体部内面にも黒斑がある。

#### (2) 壺 (図版7-2・図版13-20)

器高19.5cm、口縁径13.7cm、頸部径約9.5cm、体部最大径15cm、底部径4.2cmの広口で平底の壺で、口縁部は外反させたのち、口唇部で内寄りさせて受部をつくりだしている。体部内面には、下位でハケ目が、中位以上にヘラケズリをいずれもほぼヨコ方向にほどこし、外面には下のハケ目と重なったり交叉したりするような状況でタテ方向のやや粗雑なヘラ磨きをおこなっている。頸部と体部の接合部の内・外面及び、底部外面に指頭圧痕をおく。

#### (3) 壺 (図版7-4・図版13-22)

体部下半を欠く。球状の体部最大径20cm、口縁径12cm、頸部約10cmの広口の壺で、器体の内外面をハケ目で仕上げており、ハケ目の方向は体部外面にはほぼタテ方向、体部内面にはややナナメヨコ方向、頸部内面ではヨコ方向である。口縁部外面は、ヨコナデをおこなっている。色調等前出の二者と同じである。

#### (4) 壺 (図版7-3・図版13-21)

口縁径13.6cm、頸部径10cm、口頸部の高さ3.6cmの広口壺であるが、体部以下を欠損している。やや外反しつつ直立した頸部と大きく外反する口縁部をもち、口縁部はその端部を幅1cmの垂下口縁につくり、その端面に四条の沈線をかき、その上から合計18個の円形浮文を貼りつけ、円形浮文に竹管文をついている。頸部外面はタテ方向のヘラ磨き、内面にはまずナナメタテ方向のヘラ磨きをおこなったのち、口縁部内面とともにヨコ方向のヘラ磨きを加えている。

#### (5) 壺 (図版7-1)

口縁径13cm、頸部径8.5cm、口頸部の高さ5cmの広口壺。体部の肩部をわずかに残し、他は欠損している。大きく外反する口縁部をもち、体部外面にナナメタテ方向のハケ目がある。また、頸部と体部の接合部では、内面に指頭圧痕・外面にヘラ先端を用いて刺突痕を

つけて、接合の強化をはかっている。これもチョコレート色をした生駒山地西麓産の壺である。

#### (6) 壺 (図版13-23)

口縁径5.3cm、肩部最大径8.6cmの小型の短頸直口の壺で、体部内面には、頸部と体部との接合部に指頭圧痕をおいている。体部下半を欠損しているが、平底の底部をもつものと思われる。

#### (7) 長頸壺 (図版8-3・図版13-26)

器高18.5cm、口頸部高7.5cm、体部最大径11.8cm、口縁部最大径11.1cm、頸部径約8.2cmの体部から頸部への移動がスムーズで、やや外傾して直立する長頸壺で、径4.8cmの安定した底部は体部から突出させ、約2mmの高さのアゲ底状をなしている。器体外面には、体部と底部の接合部、体部下位と中位の接合部、体部中位と上位の接合部、体部と頸部の接合部、頸部と口縁部との接合部にいずれも、指でおさえた指頭圧痕などが認められる。また口縁部にヨコナデをおこなっている。チョコレート色をした地元製の土器である。

#### (8) 長頸壺 (図版8-2・図版14-28)

底部を欠損した推定器高約20cm、口縁径11.2cmの球形の体部をもつ長頸壺で、頸部の高さ約8cm、体部最大径14.3cmあり、やや外反して直立する口頸部は、口唇部で上方につまみあげ、そのうえをヨコナデしている。口頸部内面、体部と頸部の接合部に指頭圧痕、体部下位内面にハケ目がつき、器体外面には、口縁部に疑似凹線、頸部にタテ方向のハケ目、体部にタテナナメ方向とヨコナナメ方向のハケ目がついているほか、体部上位にあたる肩部に、ヘラ描きの記号文が表現されている。この記号文は一本の曲線文であるが、蛇を表現する絵画文であろう。胎土に1~7mm大砂粒を混入している。

#### (9) 長頸壺 (図版8-1・図版13-24)

器高18.8cm、口頸部高5.8cm、口縁径10.8cm、頸部径8.8cm、体部最大径13.7cm、底部径約4cm、底部高1cmで、器高に対する口頸部高の比率が $\frac{1}{3.24}$ とやや小さくなり、口頸部が直線的な平底の長頸壺である。器体内面の接合部には指頭圧痕を一部のこすが、ハケ目によって調整している。内面底部にヘラケズリ痕があるほか、口頸部で二カ所、体部で三カ所の接合部いずれも器体の内面において観察できる。器体外面は、下位から上位への順でほどこされた時計まわりタテ方向のハケ目調整痕がある。

また器体外面では、口縁部から体部中位に及び黒斑が、器体内面では、体部中・下位に

黒斑がそれぞれ認められる。この土器も胎土に砂粒を混入している。

(10) 長頸壺 (図版7-5)

器高18.4cm、口頸部高5.5cm、口縁径9.5cm、頸部径8.5cm、体部最大径13.3cm、底部径3.6cm。器高に対する口頸部高の比率が、前者よりもさらに小さくなり、体部の形態も最大径が底面から約9cmの高さにあり、これは体部の下底から唇の位置となることでも明らかのように、やや肩の張る器形となっている。体部中位から底部にかけては、タテ方向のハケ目をタテ方向へラ磨きで消し、口頸部でタテハケ目、体部上位ではナナメヨコハケ目をつけたのち、その上に竹管文二個をタテに並べて貼りつけている。胎土・色調いずれも当地域特有のものである。

(11) 壺 (図版8-4・図版14-27)

器高34.2cm、口縁径19cm、頸部径15.7cm、体部最大径28.9cmで、口唇部を内窓させて受部としている。この時期にしては大型の壺である。体部外面は底部のそばまで、タタキ目でうずまっている。体部内外面に輪積み成形過程での各部分の接合部が4カ所で観察できるが、はじめ輪状の各部分ごとに大部分はヨコ方向、まれには左上りにナナメ方向にたたき、体部上半では、ヨコ方向にたたいた各部分を接合したのちナナメ方向のタタキあげを、体部下半のそれと逆に右下りの順においているが、これはこのタタキあげをおこなうに際しての土器の置きかたと、タタキ板の移動方向による差異である。体部内面上位に指頭圧痕が三列をなしてめぐり、頸部と体部の境目と体部下半の内面には、それぞれ方向を逆にするハケ目をもっている。胎土に砂粒を含み、チョコレート色の色調をもち角閃石が目立つ。平底で突出した底部をもつ。また体部下半に煤が付着している。

(12) 壺 (図版5-6・図版13-13)

器体中心線で測る器高17.6cm、口縁径約14.5cm、頸部径約11.4cm、平底の底部径5.1cm、体部最大径15.7cmで、底部や口縁部など成形の粗雑さが目立つ壺である。体部内面はヨコハケ目、外面はタタキ目の上にタテハケ目がいざれもほぼ全面にわたって認められる。色調はチョコレート色、地元の胎土による土器である。

(13) 壺 (図版5-4・図版14-10)

底部径約4.5cm、体部中位以上を欠損している。体部器壁の厚さ2.5~3mm、アゲ底になっている底部の厚さ約4mmで、全体に器壁を薄く作っている。体部外面は細い幅1mm弱の細いナナメタタキ目の上をタテハケ目で、内面をタテハケ目で調整している。胎土に小量

の細砂粒（1～3mm大）の混入があるが、色調はやや明るい感じのする灰褐色で、他のチョコレート色の土器とは胎土に用いた粘土を異にしていることがわかる。

(14) 瓢 (図版9-1・図版14-28)

器高23.25cm、口縁外径16.5cm・口縁内径14.7cm、頸部径12.6cm、体部最大径19.6cm、底部径4.6cmのチョコレート色の色調をもつ甕で、底部は断面形がゆるやかな山形のカーブとなるアゲ底で、中央部では約5mm高的アゲ底とし、その外面に指頭圧痕をとどめている。くの字に外折する口縁部は、口唇部にいたって面取りをおこなっているもので、その端面に疑似凹線一条がめぐる。体部内面にハケ目が、下位ではタテ方向に、中位ではナナメ方向の上から部分的にタテ方向を加え、上位ではナナメ方向、ただし頸部に近い肩部ではヨコ方向とし、部分的にその上をヨコ方向というようにしてほどこされている。体部外面のタタキ目は、下半部では下位と中位の接合のちナナメ方向につけ、中位と上位との接合部でも同様であるが、このほうはそのあと接合部の上を横ナデしてタタキ目を帯状に消している。なお、体部外面のタタキ目の施文は、上半部と下半部とで逆の順におこなわれているが、たたき技法を加えるに際して、部分により天地逆に向けたものとみてよいであろう。

(15) 瓢 (図版9-3・図版14-29)

器高18.6cm、口縁径15cm、体部最大径16.1cm、底部径4.6cm。底部は約2mm高的アゲ底状で、外折する口縁部は、口唇部付近で上方につまみあげて横ナデしたチョコレート色の色調をもつ甕形土器である。体部内面にはハケ目、外面では下位と中位とを接合したのち横向きのタタキ目を、さらにこれと上位との接合後はナナメ向きのタタキ目をはどこして仕上げている。胎土に微細な砂粒を混入している。

(16) 瓢 (図版10-2・図版14-30)

口縁径16.9cm、頸部径12.6cm、推定体部最大径18.7cmの甕形土器で下半部を欠損している。色調はチョコレート色で、くの字に外折する口縁部の口唇部をつまみあげて受部をつくりだし、体部外面にナナメのタタキ目をつけ、体部と口縁部との接合部では、その上をハケ調整し、さらに頸部にヘラによる刺突をめぐらせて接合部の強化をはかっている。口縁部の外面の一部に煤の付着がある。

(17) 瓢 (図版9-4・図版14-31)

器高22.5cm、口縁外径17.6cm、頸部径14.3cm、体部最大径17.5cm、底部径5.5cmの平底の

變形土器である。色調はチョコレート色。口唇部はまるみをもたせ、口縁部の外側面を横ナデし、体部外側にはナナメのタタキ目をもつが、その下半部ではタタキ目をタテ方向のハケ目で消している。体部外側の中位から下位上部にかけて及び、内部下位にそれぞれ黒斑がある。

(18) 麋 (図版9-2・図版14-32)

器高22.4cm、口縁径22.2cm、体部最大径22.65cm、底部径5.5cmのチョコレート色をした變形土器である。口縁部は、口唇部を上方につまみあげて尖頭形の受部をつくり、横ナデをほどこしている。体部内面上半にタテ方向のハケ調整をおこない、外側は下位と中位はヨコ方向のタタキ目、上位ではナナメのタタキ目をついているが、下位のタタキ目が幅1cmにつき4～5条のタタキ条溝をもつに対し、中位と上位のそれは同じ幅につき2～3条のタタキによる条溝であって、この両者の間にタタキ板の差異を認めることができる。また体部外側下位と中位の接合部を指頭で压えてナアしている。中位と上位の接合の場合は、中位にタタキを加えたのち上位を接合し、次に上位のタタキを加えている。なお、下位と中位以上とで、タタキを加えていく方向が逆になっているが、これも形成の際の器体の置きかたや持ちかたによるものと思われる。この点については前出例もあったように、他に類例は多い。

(19) 麋 (図版10-2・図版14-33)

器高14.3cm、口縁径17.4cm、頸部径13.5cm、底部径4.3cmを測り、鉢に近い器形をもっている。大きく外折してのびる口縁部の口唇部をわずかにつまみあげて受部をつくり、口縁部内側に指頭圧痕をめぐらせていている。これに対し外側では、体部の上位と口縁部との接合部に、内側に比べて小型の指頭圧痕がめぐる。これは、手の親指を内側におしあて、同時にひとさし指を外側におしあて、接合と形成をおこなった結果である。体部外側には他の例にも同様から観察でき、またその一部については紹介したとおり、二種以上のタタキ板を使用したことを示すタタキ目がある。タタキ方向、タタキ板の差異が一個体の土器において認められる場合、その多くが部分毎に仕上げた器体各部を積みあげるなどして、接合したものとみなすことができるであろう。器体の外側の全体と、内側の一部に煤が付着していることは、この土器が變形土器としての機能を持っていたことを示している。

(20) 鉢 (図版10-4・図版14-34)

器高13.3cm、口縁径23.3cm、底部径4.5cmあり、高さ約7.8cmの体部中程のところに接合部がある。色調はチョコレート色を呈し、外側面をハケ調整のちヘラ磨きで仕上げてい

るが、体部外面の底部付近では、指頭圧痕の上をヘラ磨きしている。底部側面（外面）には指頭圧痕がめぐり、口縁部は大きく外方に傾き、その端面を面取りしたのち、横ナデをおこなっている。なお、ヘラ磨きは、外面でタテ方向、内面でヨコ方向である。底部下面の中央を、直径1cmで高さ約1mmのアゲ底状に作っている。

(21) 鉢 (図版10-3・図版13-35)

口縁径29.4cm、体部最大径26.5cmで底部付近を欠損するチョコレート色の鉢形土器で、半球状の体部内外面に、タテ向のヘラ磨きを密におこなっている。口縁部に一部消し残した細いナナメ方向のタタキ目が認められる。口縁部には口唇部でつまみあげて、その断面形が尖頭形となる受部をもっている。

(22) コシキ (図版11-1A・図版11-1B・図版14-36)

器高8.9cm、口縁径17.7cm、底部径4.6cmで底部に最小径約1cmの1孔をもつチョコレート色の鉢形穿孔の土器であって、コシキと考えられる。口縁部を内弯させ、口唇部断面形は尖頭状としている。体部外面に消し残した細いタタキ目と径4mmの小さな円形浮文1個があり、口縁部には口唇部に指頭圧痕がある。底部の穿孔は、ヘラ状の用具を用いて切りとてあけている。また突出した底部の外面にもタタキ目がつけられている。

(23) コシキ (図版11-2A・図版11-2B・図版14-37)

器高9cm、口縁径12.4cm、底部径3.9cmのチョコレート色の色調をもつコシキである。穿孔部は底部上面で径1.2cm、下面で6mmあり、底部下面の形態は平底となってはいるが、穿孔部の周囲が約2mm外方へもりあがっているため、この土器を水平面に直立させることは困難である。鉢形の器形をもつが、鉢的な機能を本来もたないコシキとして作られたためであろう。体部外面を粗いヘラ磨きしている。胎土に1~9mmの砂粒の混入がみられる。

(24) 高杯 (図版5-5・図版12-11)

器高17.3cm、口縁高1.7cm、脚部高約9.5cm、色調はチョコレート色。やや内弯する体部に外反する口縁部をもち、中空でラッパ状に広がる脚部に透孔をもうけている。器体の外面にハケ調整のちタテヘラ磨きを、杯部内面は口縁部でヨコヘラ磨き、体部でタテヘラ磨きをおこない、口縁部外面をヨコナデしている。脚柱部内面上位には指頭圧痕、裾部内面にヨコハケ目が認められる。裾部の端部はわずかに上方へ立ちあがらせ、ヨコナデを加えている。

#### (25) 高 坯 (図版6-1・図版12-12)

器高13.3cm、脚部高約8.4cm、口縁径17.5cm、底部径15.8cmで、浅い椀状の杯部と、ラッパ状に大きく広がる脚部をもつ高環形土器で、脚部端に4個の透孔をもち、器体外面を体部・杯底部付近(杯部・脚部の接合部)・脚柱部・脚裾部の順でタテ方向にヘラ磨きし、口縁部と裾部末端を横ナデして仕上げている。なお体部内面にもヘラ磨き痕がわずかに観察できる。脚部内面はハケによる調整をおこなっているが、透孔のすぐ上方付近には、指頭圧痕がある。土器の色調はチョコレート色で、胎土内に1~7mmの砂粒を混入している。

#### (26) 高 坯 (図版6-2・図版12-14)

脚裾部の下半を欠損しているチョコレート色をし、裾部に二孔の透孔をもつ高環である。推定器高約15cm、環部高7.5cm、口縁部高3.5cmで、口縁部の高さが体高と同じ程に発達し、大きく外反する高環である。器体は、口縁部・体部・脚柱部・脚裾部の各部分を接合して形成しており、体部の器壁は5mm前後の厚みにやや薄く作っているのに対し、口縁部の器壁は5mm~9mmとなって肥厚している。脚裾部は前出例よりもさらに大きく外反して広くものであって、脚柱部内面にはシボリ痕が全面にある。脚裾部にタテハケ目があり、その上端にかぶさって脚柱部にタテヘラ磨きが、また、体部外外面にもタテヘラ磨きをおこなうが、体部外外面では全面をヘラ磨きをしたのち、その上からナナメとヨコ方向にハケ調整をおこなっている。口縁部は、内面をタテヘラ磨きで、外外面は横ナデ調整で仕上げている。

#### (27) 高 坯 (図版6-4・図版12-16)

脚部高10cm、脚部下底径17cmの裾部に径約1.5cmの透孔三孔を、外面から内面に向けて穿孔したところのチョコレート色をする高環脚部で、环部を欠損している。脚部外外面にタテ方向のヘラ磨きを、まず脚柱部におこない次いで裾部にもおこなっているので、透孔はヘラ磨き調整ののちにもうけたことが観察によってわかる。脚部内面は、上半にシボリ目をとどめ、下半では透孔付近の高さに指頭圧痕をのこしているほか、透孔下方に黒斑がある。胎土に1~2mmの細砂粒が混入している。

#### (28) 器 台 (図版6-3・図版13-15)

底部径約18cm、体部最小径9.4cmの底部から口縁にいたる器形の側縁線が、曲線的なラインをもつ形態で、体部と口縁部との接合部から上の部分(口縁部)を欠損しているが、色調チョコレート色の裾部上位に透孔をもつ器台形土器である。器壁厚約7mmの裾部は、外外面にタテハケ目を、内面にはヨコハケ目がのこり、器壁高約1cmの体部外外面にタテ方向のヘラ磨きがある。

(29) 器台(図版6-5・図版13-17)

口縁径14.3cm、体部最小径5.3cm、口縁部高3.1cmで裾部を欠損した器台形土器で、脚柱部に9条一帯の櫛描きで直線文帯と波状文帯を交互に飾る装飾性の強い器台である。口縁部外面形は二重口縁状をなしているが、内面形は曲線状を呈している。また、口縁部内外面をタテ向きのヘラ磨きし、端部でつまみあげた口唇部には、ヨコナデ調整をおこなっている。色調はチョコレート色で、胎土に1~5mmの砂粒が混入する。(瀬川芳則)

## 6. ま と め

調査地域は本文で示したとおり、送・配水管の布設される幅3メートル・深さ3メートルの規模で約400メートルの距離を対象とした。生駒山西麓の東西方向土層構成と遺物散布状況についての資料としては八尾市域では最初のものである。

1・4・7地点では少量であるが須恵器・土師器を併含する遺物包含層が確認できた。擾乱された地区を含め、花岡遺跡近接地城には古墳時代の遺跡の遺存を想定することができる。

9地点では土師器の庄内II式単純包含層が検出され、高杯・壺など数点の完形品を含む溝状遺構の一部を確認した。

8・10・19~21・23地点では弥生後期の遺物を検出した。

とくに9~10地点の地域では幅2メートル・深さ1メートル・底部で幅約30センチのV字溝状の大溝が検出され、この大溝は北と南に明瞭に統いており、溝内からは大量の弥生後期土器が出土した。したがって、この大溝の全貌は明らかでないが、将来の調査を必要とする地域であることを指摘しておきたい。溝内遺物は二層に大別できたが、上層遺物は破損が目立ったが、下層遺物は完形品を主としていた。個々の遺物の特色と細部は本文に示した通りであるが、壺・壺・鉢・高杯・器台等がセット関係で検出されている。弥生後期後半の土器は各地で編年の細分化が試みられているが、当地域でも弥生後期を前半2期・後半3期に分類することが可能である。この場合、大溝内出土の遺物は前半II期を上限とし、後半III期を下限とするもので、大半は後半II期に集中している。当然のことながら生駒山西麓の弥生後期土器の編年に有力な一括資料を提供している。若干の摂津系土器が混在している事実も注目される。また河内平野の平地の土器と少しく焼成・土質を異にしている点も今後の研究課題となろう。

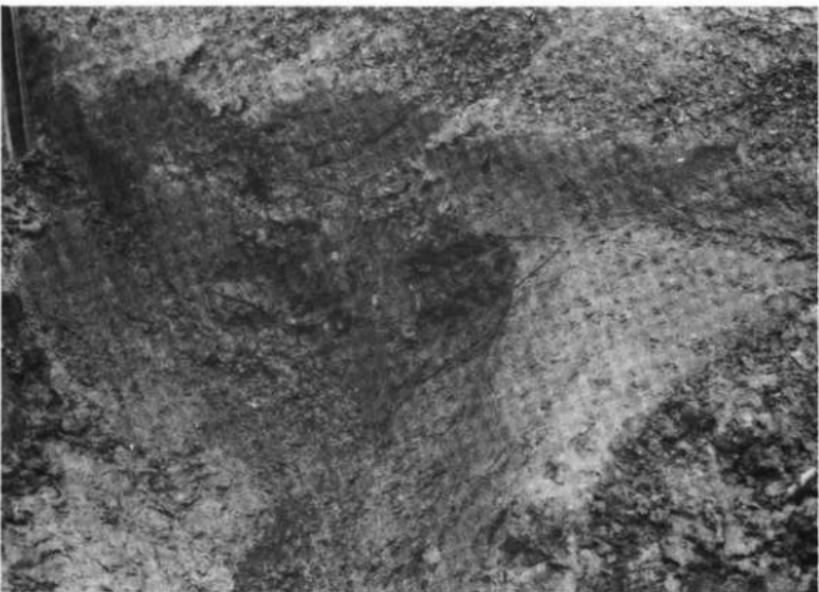
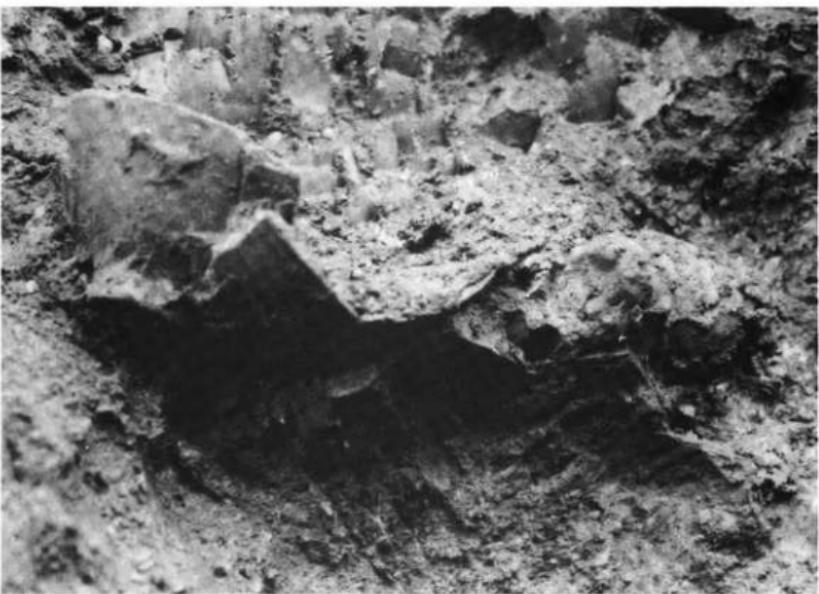
(村川 行弘)



図版1 溝状遺構内の土器出土状況









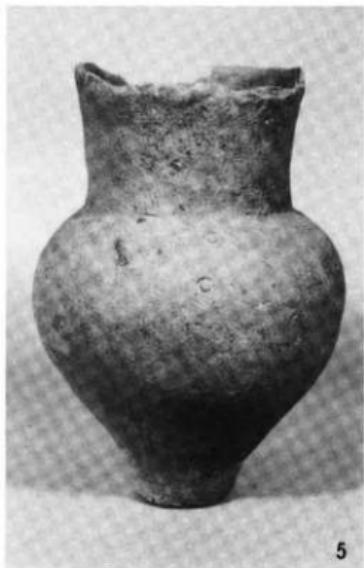
1·2·4 第9地点一括出土  
3·5·6 第10地点上層出土土器



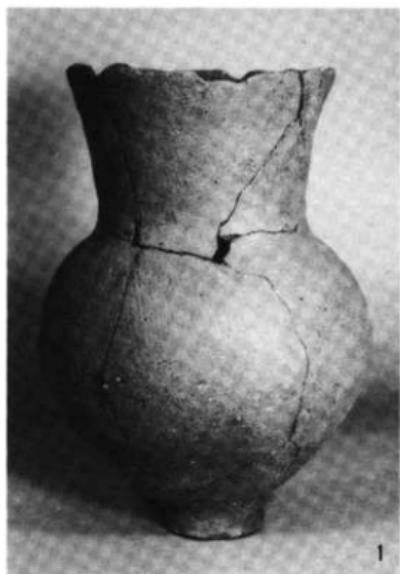
1・2・3 溝状遺構上層出土土器  
4・5・6 溝状遺構下層出土土器



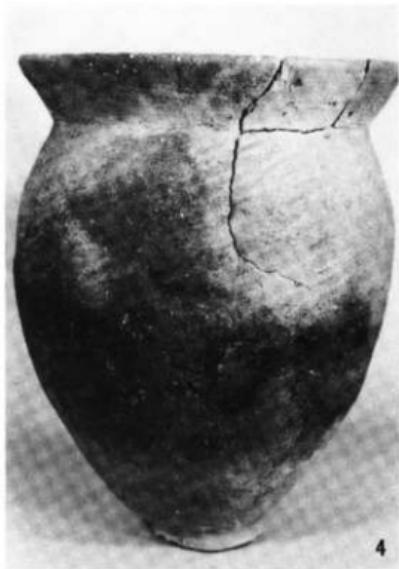
1～6 溝状遺構下層出土土器



1～5 溝状遺構下層出土土器



1～4 溝状造構下層出土土器



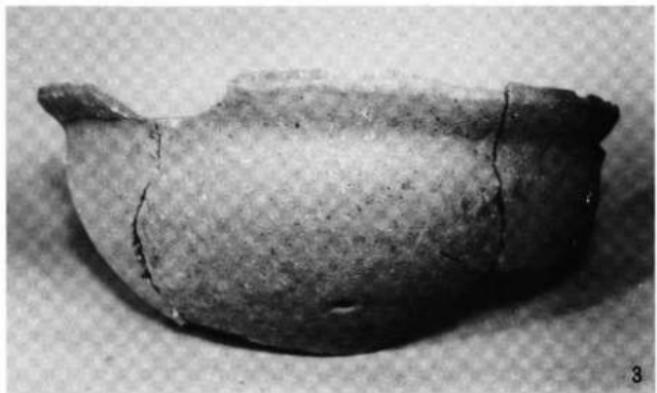
1～4 溝状遺構下層出土土器



1



2

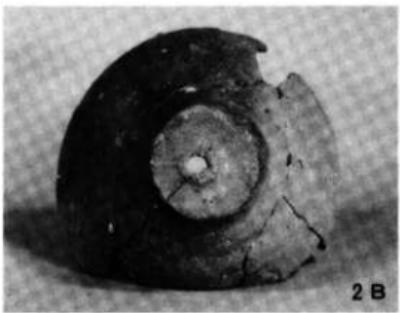
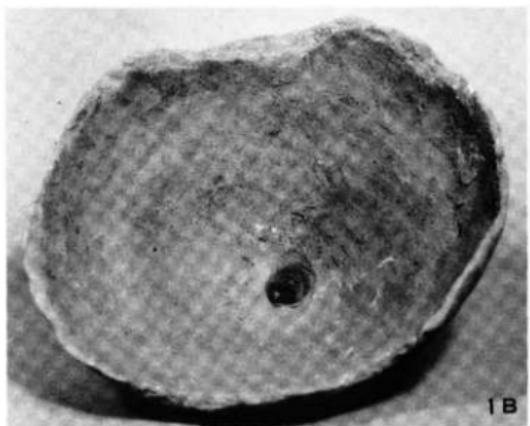


3

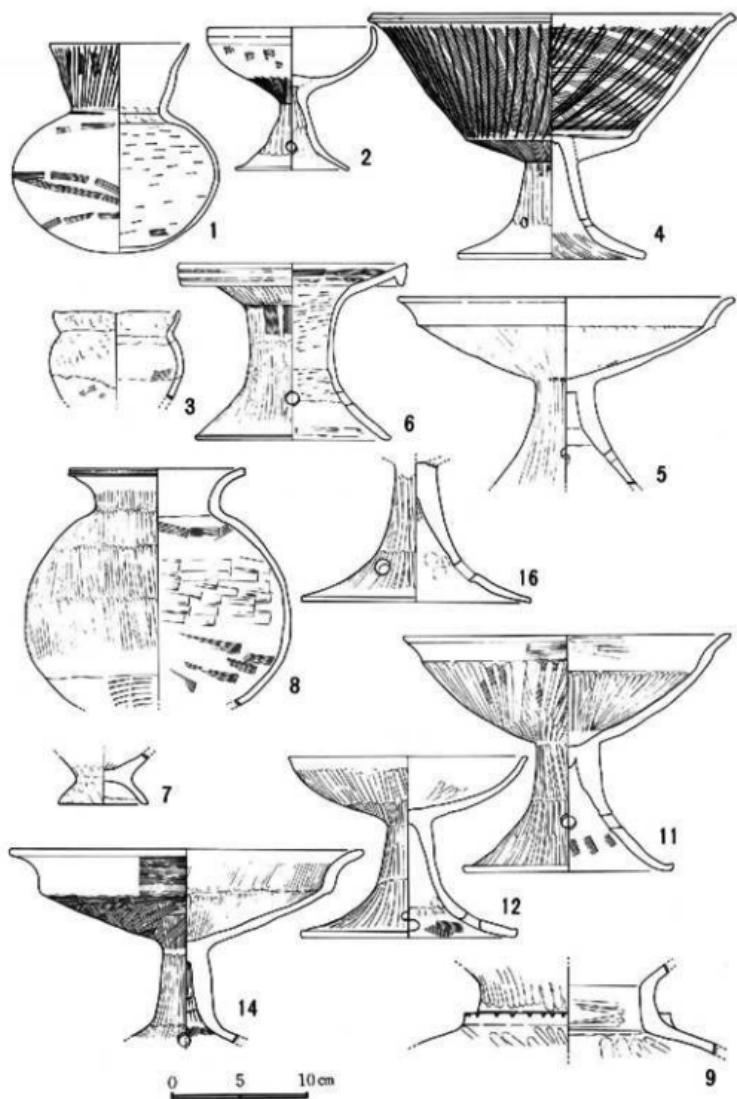


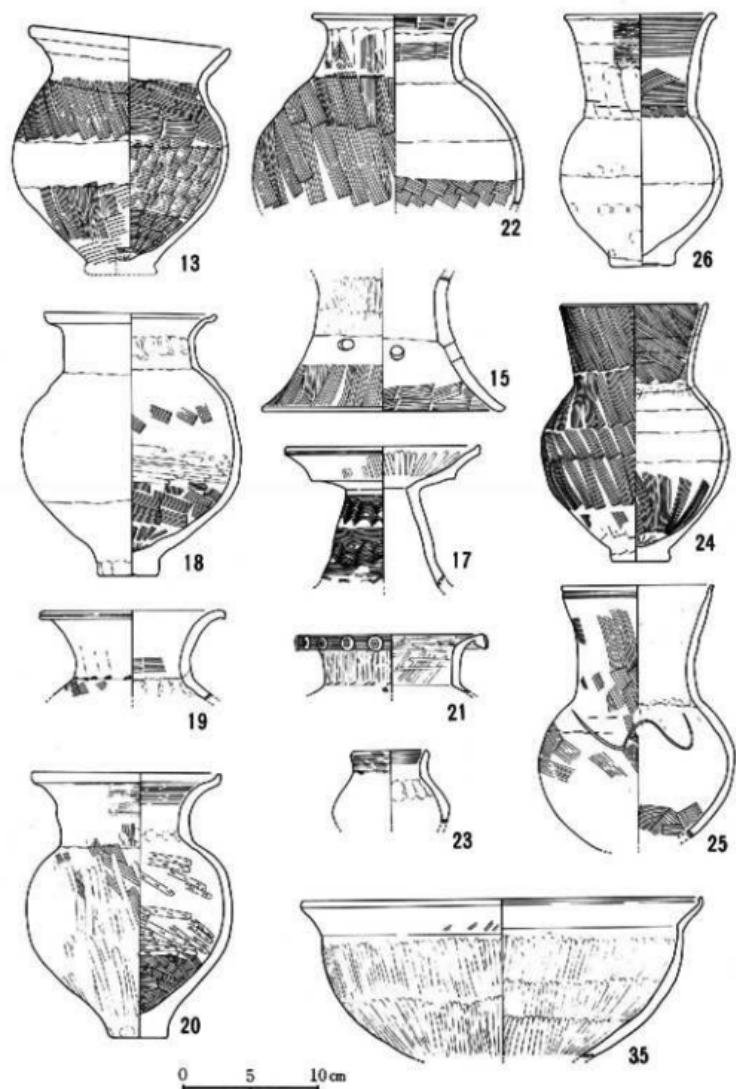
4

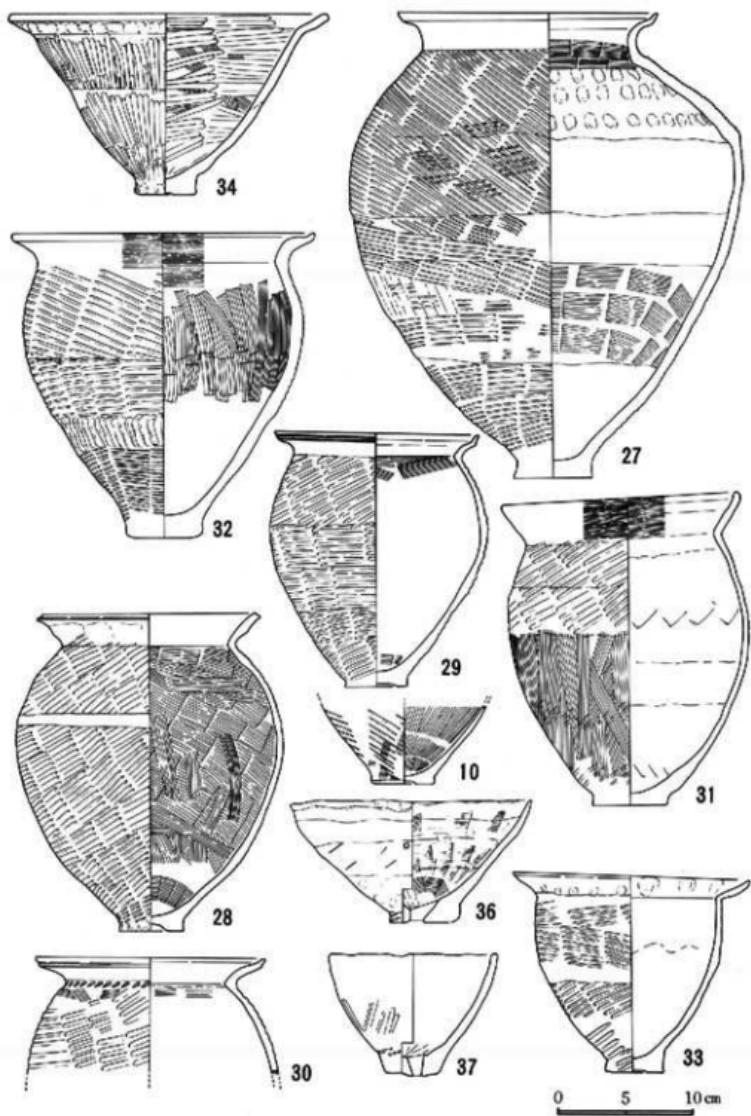
1～4 溝状遺構下層出土土器

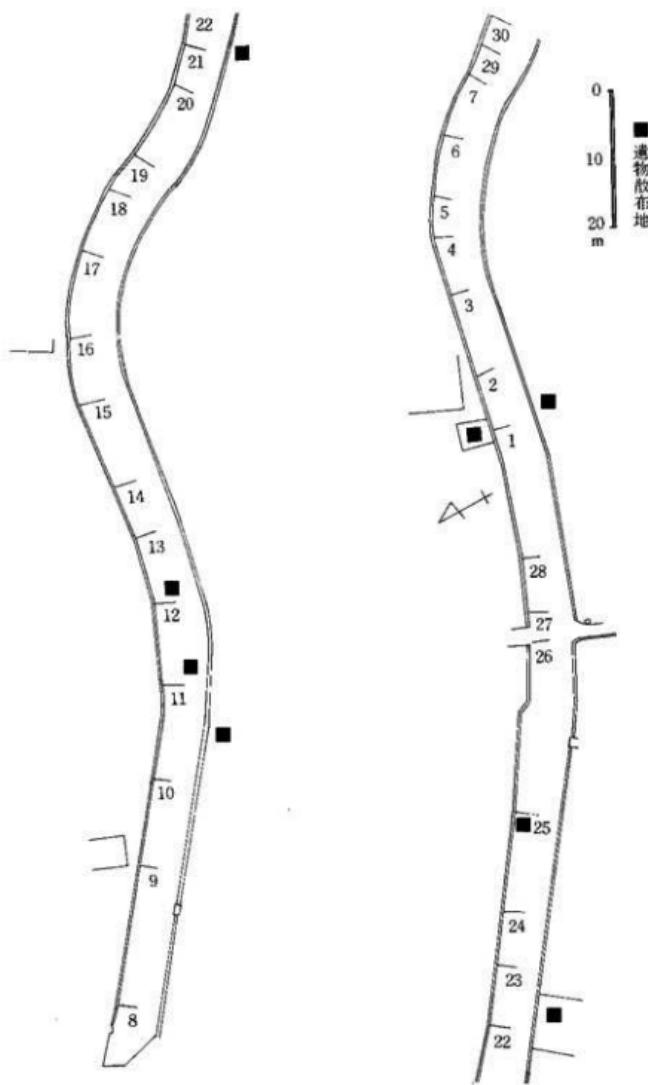


1 A～2 B 溝状造構下層出土土器



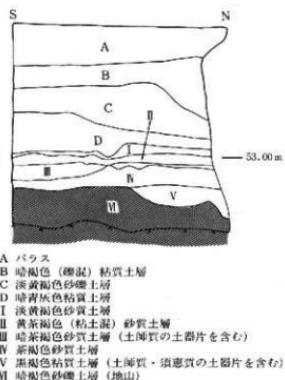




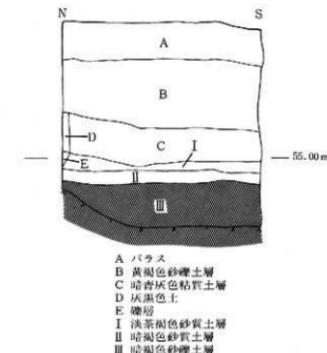


0 1 2m

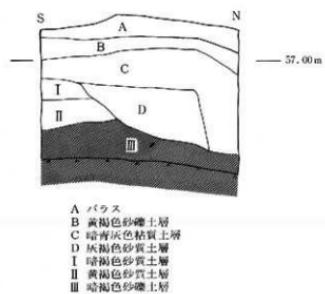
第1地点



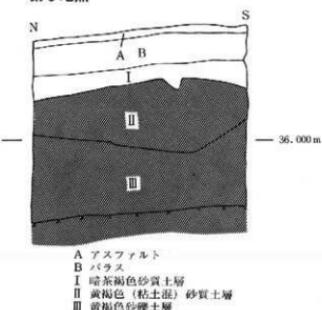
第4地点



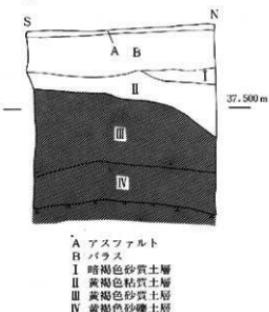
第7地点



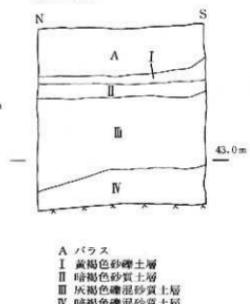
第8地点



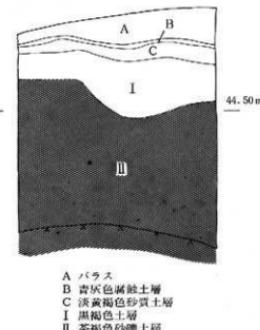
第9地点



第19地点



第21地点



お世話になった方々

八尾市教育委員会関係

坂本正一(教育長)、西辻 豊(教育次長)、宇埜 晃、山本 昭 他

八尾市水道局関係

西川 実(局長)、宮内右和(理事)、福中保則、永木敏夫、西脇富雄 他

大学関係

金沢尚淑(理事長)、鯉谷義雄(理事)、吉田力雄(学長)、北島平一郎、名取健昭、

矢間博司、金山方子、岩城孝信、浅田 一、畠山吉成、井上賢三、北村一雄 他

その他

森岡秀人、坂本治郎、宇治田和生、片岡 修、横藤田晶子、西田敏秀

河内大竹遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和55年5月31日

発行 八尾市教育委員会

大阪経済法科大学考古学研究室内

大竹遺跡発掘調査団(代表村川行弘)

編集者 村川行弘・瀬川芳則

印刷所 田中耕株式会社

